

今年も当社にフレッシュな新入社員が入社した。その姿を見て、新社会人になった頃の自分を思い出した。当時の新卒で入社した会社は言葉も文化もなじみのない愛知県企業だった。そのため福島弁でのんびり育った私には聞きなれない方言が少々きつく感じられ、なんだか怒られているような印象を持っていた。

しかし、日々過ぎていく中で方言に慣れていくと、先輩や上司が丁寧かつ熱心に私を信頼しながら、指導してくれていたことに気が付いた。いつしか方言にも愛着が芽生え、仕事を覚えることがとても楽しくて仕方なくなるような心の変化が生まれたのであった。

モチベーションを上げさせることも下げてしまうことも、相手に投げかける言葉ひとつで大きく変わる。今振り返ってみると、当時の先輩方は単純な私をうまくコントロールしながら育て

民 報 サロ ン

てくれていたのかもしれない。

言葉に心を救われることはできるし、時には心を傷つけることもたやすくできる。相手にどう伝えたいのか。どうなってほしいのか。相手へ敬意を持ち、言葉を届けることが大切であると感ずる。

会社をけん引していく立場となった

のだ。

日常の中で、どうしても指導や指摘をしなくてはいけない場面に直面するのだが、厳しい指摘をした後にも必ず相手への敬意を忘れず、フォローの言葉を意識しているつもりだ。だからこそ、常に相手の気持ちに寄り添いながら「伝え方」をいつも試行錯誤してい

人の心に灯りをともし



近藤 有美

今、リーダーとして人の心を動かせる

ような人物になることができれば、組織を、そして会社を動かすことはできない。とげのある伝え方をした

ところで、相手の腹に落ちなければ何の意味もないばかりか、嫌な思いをさせるだけなのである。それはただ己の感情を爆発させているだけではない

る。

相手の心に灯（あか）りをともし

くれる方、逆にいい意味で反面教師となつて気付かせてくれる方など、さまざまの方と出会う中で、たくさん

の気が私の成長につながることによ

り、それが企業の成長に還元できるようになる。新入社員のおかげで初心に

返ることができたそんな4月の初旬であった。

そんな新入社員となった彼女らに入社式の中で「失敗を恐れず挑戦し続けよう」と伝えさせてもらった。失敗を怖がって何の挑戦もしなければ、苦悩もなく平穩に過ごすことができるかもしれない。しかし、それでやりがいを見つげられるであろうか。せっかくフジ機工に入ったのだから、社会人になったのだから、仕事でのやりがいをみつけてほしいし、挑戦したからこそ得られる自信を手にいれることができる。

失敗しても成功しても、挑戦したということが己の成長につながるのとは間違いない。

そんな話をさせてもらった自らも、できる限りのことにはチャレンジし、社員や家族の心の原動力になるためにまい進し続けていく。

(中島村清津、フジ機工社長)